

ブラック・ジャックは遠かった 久坂部 羊

■阪大にあったウラ標本室。著者は、この中のいくつかは、手塚治虫のマンガに描かれていたと別ページで言っている。

それがウラ標本室で、かつては実習に使われていたようだが、私が見つけたときには、もう何年も人が立ち入った形跡はなかった。

棚に並んでいたのは、先の小説にも引用したグロテスクな標本の数々である。シヤム双生児、無脳児、ハンセン氏病、奇形腫、梅毒、脊椎カリエス……。無気味で恐ろしい標本が、埃まみれのガラス瓶でホルマリン漬けになっていた。標本瓶はふたに球形の把手がついた古風なデザインで、貼られたラベルには、流麗な手書きのラテン語名が書き込まれていた。

(中略)

大学を卒業したあとも、私はこの標本室に何度か訪れた。モノ書きの友人を案内したこともある。夜に行ったのだが、部屋の電気はつけられないから、懐中電灯で照らしてまわった。白い手や半分に割った顔の標本などは、どんなホラー映画も及ばないグロテスクさだった。当たり前だ。本物なのだから。出入りはまったく自由で、扉には鍵もかかかっていなかった。なんと無防備だったことか。その気になれば、生首を持ち出すことも可能だったのだから。その気にならなくてよかったが。

その後、大阪大学の医学部は、1993年に中之島から吹田に移転した。それに伴い、このウラ標本室も撤去されてしまった。

■暴露話——国試の問題が漏れている。

試験範囲が膨大なので、各大学では出題される問題の予想が盛んに行われていた。我々のクラスでも国試対策委員会が作られ、予想問題の情報がいくつも流れた。

試験の当日、私は会場へ向かう途中で、神戸大学に行った高校の同級生といっしょになった。国家試験は選抜ではなく資格試験なので、受験生は互いにライバルではない。むしろ同志なので、積極的に情報を交換し合う。神戸大の友人は、C問題に「蝶形紅斑ちょうけいこうはん（頬に蝶の形に出る赤い皮疹）」が出ると教えてくれた。

私は試験会場に着いて、さっそく同級生にその情報を伝えた。果たして、テストには蝶形紅斑の写真が出た。C問題は出題数が少ないので、1問の比重は大きい。

2日目の試験でも同じ友人といっしょになった。

「昨日の予想、見事に当たったな」

「そらそうや。あれはある大学の女子医学生が、出題者の教授からベッドで聞き出した情報やから。そんで今日の小児科には、突発性発疹が出るらしいぞ」

私は勇み立って同級生たちにこの情報を流した。これも大当たり。私は見知らぬその女子医学生に心より感謝した。

試験が終わると、会場の出口でさっそく国家試験用の予備校が解答を配っていた。試験終了とほぼ同時に刷り上がっていたのだから、事前に問題が洩れていたにちがいない。私たちは恨めしく思いつつも、解答をもらって喫茶店で自己採点をした。

(中略)

発表は試験の1カ月半後。正式には厚生省の支局に張り出されるが、その日の朝刊にも掲載された。紙面に自分の名前を見つけた私は、ホッとすると同時に心に誓った。これで試験と名のつくものは、もう生涯受けないぞ、と。

■医療には”演技”が必要。

患者の看取りについては、先輩医師から「慌てず、騒がず、落ち着かず」と教えられた。慌てると新米であることがばれるし、騒ぐと医療ミスがあったのではと疑われる。「落ち着かず」というのは、あまり冷静だと、はじめからあきらめているように思われるので、適度に慌てて緊迫感を出せという意味だ。そういうことは大学では習わない。医療には”演技”が必要だという、現場ならではの教育だった。